

直冬・頼尚

しかし、尊氏と吉野方の和睦が正平七年（二三五二）閏二月十五日、崩れるとともに、一色

南朝方へ

直氏と懐良親王との間も、しだいに冷え、孤立して苦境に立たされていた少弐頼尚が、中国

地方へ逃れ南朝方に降っていた直冬の画策によって、南朝方に降り、菊池武光の支援で、太宰府浦城での一色直氏方の包囲を解くと、今度は、少弐勢を加えた懐良親王方が優勢となり、正平八年二月二日、筑前針摺原（筑紫野市）の合戦で、少弐頼尚・菊池武光軍が一色範氏軍の田原貞広一族多数を戦死させるなどの成果をあげて破り、一色直氏を肥前綾部城に追い込んだ（『北肥戦誌』）。

足利直冬は、これより前、長門国へ移り、やがて南朝方へ降伏して、安芸の毛利氏や山陰の山名時氏・師氏父子に擁せられて、伯耆国から上洛し、一時的ではあるが、京都を占領するほどの勢いを示した。

四 征西將軍宮懐良親王と郷土

懐良親王の

足利直冬が中国方面へ去って南朝方へ降り、その周旋によって、少弐頼尚が懐良親王方と合

九州入り

体すると、九州では南朝方が優勢となって、懐良親王の多年の苦勞が報われることになった。

後醍醐天皇の第十六皇子とされる懐良親王は、建武三年（二三三六）、天皇が叡山へ難を避けていたとき、五条頼元ら一二人に守られて、紀州和歌山辺から船出し、九州へ向かった。このとき七歳であったという。

熊野水軍に送られて、伊予国忽那島に着き、忽那義範に擁護されて三年を送り、更に瀬戸内海を西行すること三年、薩摩の山川港に入り、谷山城主谷山隆信に迎えられた。ここで六年を過ごし、肥後の菊池氏を頼

つて宇土に上陸して隈府わづみに入った。正平三年（二三四八）のことで、親王は十九歳の青年になっていた。

観応の擾乱（観応元年―二三五〇―文和元年―二三五二）中、足利直義や尊氏が一時的とはいえ、南朝方と合体したことは、九州の南朝方をも勢いづかせ、肥後の菊池・阿蘇氏は肥後から筑後川南岸にまで支配地域を拡大していた。

一色直氏が直冬・頼尚勢を攻撃するため、南朝の軍事力を借りて、直冬を長門へ走らせることに成功したが、足利尊氏が吉野方と手切れすると、孤立していた少弐頼尚が南朝方へ接近してきた。

懐良親王の 少弐頼尚の軍勢を加えた懐良親王は、正平十年（二三五五）九月、肥前小都城せうぢの一色直氏を

北九州制圧 攻め、十月には豊後の日田・玖珠・由布・狭間・府内と軍を進め、大友氏泰を降し、大神・

豊前宇佐・城井と進んで、豊前の守護であった宇都宮守綱を降し、筑前殖木うゑき・博多と九州を半周する大遠征を行って、一色方の諸将を降し、宮方優位の地位を確立した。

この遠征によって、一色直氏は長門へ走り、その父道猷は京都へ帰ってしまった。

宇都宮守綱は、文和三年（二三五四）八月、弟公景以下、一族の者多くを討ち死にさせた功勞として、豊前国延勝寺・今富庄がふ・中元寺などを与えられ、同時に、豊前国守護職に補任されたらしい。

宇都宮守綱が豊前国守護としての任務を示す唯一の史料が次の『大友家文書録』の將軍足利義詮御教書である。

豊前藏人（田原直貞）三郎入道正曇代重海申す豊前国荻田庄地頭職の訴状、これを遣す。氏家九郎・同子息掃部助・

荒宇津大和孫太郎以下の輩、所務を濫妨すと云々、事実ならば、太然（はなはだ）るべからず、彼の輩を退け、下地

を正曇に沙汰し付け、請文を執り進ずべきの状、件の如し

文和三年十二月二十日

（足利義隆）
御判

宇津宮常陸前司殿

（原文は漢文）

この意味は、少弐頼尚の肥後国守護代であった饗庭彈正左衛門宣兼のふなむねが所持していた荊田庄地頭職を勲功の賞として田原正曇へ宛行あてがったが、荒津津大和孫太郎（宇都宮頼房の子孫カ）や氏家九郎父子らが、田原氏の命令に従わないと訴えるので、宇都宮守綱をして、下地を田原氏へ打ち渡すよう命じるというものである。

宇都宮守綱は、多年筑後国の守護職を務めてきたが、少弐頼尚を味方に加えた宮方が強勢となつて、筑後国はほぼ宮方の支配下に入ったために、豊前国へ配置替えされたと考えることができる。

頼尚北朝方へ

少弐頼尚の豊前守護職は、懐良親王によつて安堵された。しかし、少弐頼尚は貞和年中（二三四五―五〇）から大野井庄を押領していると弥勒寺から訴えられて、正平十一年（二三五〇）これを寺家へ返却させられたらしく、守護代西郷兵庫允顕景が安東孫次郎入道助阿・舎弟三郎次郎入道生阿らと組んで、この庄を違乱し、やがて、神官・社僧を殺害するに及んだため、宇佐宮が神輿を動座して訴えたので、懐良親王は頼尚の守護職をやめ、国司五条左馬権頭良遠を下向させて、国務を執行させ、守護には、頼尚の長子で前々から南朝方として行動してきた頼澄を任命し、守護代として菊池武光の弟武尚を派遣した。

少弐頼尚は、これを不満としてか、あるいは、鎮西管領を駆逐して、九州北部の支配権を承認するという足利義隆の工作にに応じてか、北朝方へ寝返る。直冬のこと以来、険悪な関係にあった足利尊氏の死も頼尚を

幕府方へ復帰させる契機となったであろう。

正平十四年（二三五九）三月、菊池武光が大友氏時の籠城する高崎山を包囲している留守を衝いて、少弐頼尚は、懐良親王軍を襲い、これを高良山へ撤退させた。

大保原の戦い と頼尚の凋落

正平十四年（二三五九）八月懐良親王は、太宰府の少弐頼尚を攻撃するために、八〇〇〇を率いて、筑後川を渡ろうとした。少弐頼尚はこれに対処するために六万余の兵をもって味坂庄（小郡市）に陣を取り、大保原（小郡市）に陣替えした。八月十六日の夜、菊池肥後守武光の夜襲から、激戦が始まった（『太平記』）。この戦いで、少弐頼尚は、嫡子忠資をはじめ一族二三人、郎従四〇〇人など三〇〇〇余を戦死させ、太宰府へ退いた。戦死した郎党の中に、西郷兵庫允顕景や饗庭右衛門蔵人宣尚ら、守護代クラスの武将が多数いた。宇都宮守綱も頼尚側に加わって奮戦し、懐良親王も三か所の深手を負って危地に陥ったという（天本孝志『九州南北朝戦乱』）。

懐良親王落馬の危地を救おうとして、宇都宮三河守隆房が戦死した。隆房は大和太郎左衛門と称した人物と考えられている。懐良親王は彼の忠節を賞して、後に「宇都宮大明神」として、肥後国木葉村に祭ったという。この戦いで、宮方も戦死者一八〇〇余を数えたといわれる。

大保原の合戦で、一族と郎党の多くを失った頼尚は、太宰府有智山城にこもることが多く、目に見えて凋落した。

正平十六年（二三六一）八月、懐良親王と菊池武光は太宰府安楽寺へ陣を進め、有智山城を攻撃して、頼尚を背後の宝満山へ追い上げ、やがて、太宰府を落ちて京都へ上り、隠遁生活に入らしめた。

ここに、懐良親王は大宰府を収めて、名実ともに九州の支配者となり、応安五年（二三七二）八月、今川了俊に敗北するまで、一二年間、九州に君臨した。

正平十六年十月、新鎮西管領として、斯波氏経が豊後高崎山に立てこもる大友氏時を頼って渡海してきた。斯波氏経が在任した二年間は懐良親王方の勢威が最も強かった時期であったから、豊後から豊前・筑前への進出をねらって、種々画策したが成功しなかった。

馬ヶ岳の戦い

このころ、馬ヶ岳の戦いが諸書にみえる。康安二年（二三六二）八月以前、豊前国に攻め入った斯波氏経と大友氏時軍は、三か度の合戦に打ち勝ち、八月七日の合戦では、南朝方の守護代（菊池武尚）以下、しかるべき仁五〇余人を討ち取り、敵はことごとく降参し、一国の大略が味方になったと、阿蘇大宮司へ報じている。

大友氏時も、中豊前の戦いで、守護（少弐頼澄）の又代官以下、むねとの者三〇余人、合わせて七〇余人を討ち取ったと述べている。中豊前とは城井か馬ヶ岳辺を指すと思われる。

しかし、菊池武光軍が到着して、間もなく奪回されたらしく、貞治二年（二三六三）五月の『山田聖栄自記』に、周防の大内介弘世が渡海して、氏経を支援したため、菊池武光は退散した。大内弘世が帰国するとまた南朝方の支配に戻ってしまったとある。

『太平記』では、大内弘世が三〇〇〇余騎を率いて豊後国に押し寄せ、菊池武光と戦い、二度目の戦いに負けて降を請い、命を助けられて帰国し、幕府方となってから初めて京都へ上った。このとき、弘世は数万貫の銭貨、新渡の唐物などを奉行・頭人・評定衆・傾城・田楽・猿楽・遁世者に至るまで与えたので、褒め

ぬ人はいなかったと記している。

『歴代鎮西志』や『続本朝通鑑』（『大内氏実録』）は、このことについて、誤りも指摘できるが、次のように記している。

正平十九年（一二六四）、管領細川頼之よりゆきの誘いで、幕府方へ降った周防の大内弘世（義弘とある）は、長門・周防・豊前の守護職を得て、長門国の前守護厚東氏こうとうを九州へ奔らせ、門司城に拠らしめた。大内弘世は厚東氏を追って豊前へ渡り、門司城を攻めたので、懐良親王は名和・宇都宮・堤・岩松氏ら三〇〇〇余を門司城へ送り、菊池武勝は兵二〇〇〇をもつて門司城を支援し、原田・秋月・山鹿・麻生・宗像等五〇〇〇人ばかりも厚東氏を応援した。ところが、紀井出羽守（出羽守）は宮方に従わず、芦屋にいた大内弘世を招いて馬ヶ岳城に入り、宮方と対陣した。二月十三日、名和伯耆守長生は兵三〇〇〇をもつて馬ヶ岳を攻め、菊池武勝・厚東駿河守の来援もあつて、大内弘世は敗走して、わずか五〇余騎で香春岳に逃げこもつた。しかし、大軍に包囲されて、救援なく、大内弘世は名和長生の旧好を頼んで降参した。この時、長門国を厚東氏へ返還することになったが、弘世はこれを実行しなかつたので、豊前守護菊池武勝を長門へ派遣してこれを制圧した。

それより以前、菊池武勝は紀井出羽守の拠る岩錯城（岩）を攻めて降し、出羽守を誅し、宇都宮老岐太郎貞房を紀井家の家督として、紀井城に居らしめた。

『八幡善法寺文書』などによると、このころの豊前守護は少弐頼尚の子息の頼澄、守護代は菊池武光の弟武尚、国司は五条頼元の子左馬権頭良遠であり、幕府方の守護



国司五条良遠の花押

は少弐頼尚の子冬資であることが明らかである。したがって『歴代鎮西志』の記述をそのまま信じることはできない。

五 九州探題今川了俊と宇都宮氏の乱

今川了俊の九州上
陸と大宰府陥落

斯波氏経が帰洛したあと、洪川武蔵守義行が鎮西大將軍として派遣されたが、備中・備後まで下向したものの、九州へ渡海できないまま、帰京してしまった。

応安三年（二三七〇）七月一日、国東の幕府小番衆田原氏能へ、今川伊予守貞世入道了俊が九州へ下向することを告げ、十月、佐田経景へも次の手紙を送って協力を依頼した。

九州の事、仰せ付けられ候の間、罷り下るべく候、最前御合力候ハバ、殊に御忠たるべく候、然らば、日ごろの御忠節、今度いよいよ御賞（しょうかん） 翫（か）あるべく候也、恐々謹言

（応安三年）
十月廿七日

了俊（花押）

宇都宮因幡大膳亮殿（佐田経景）

（『佐田文書』原文は漢文）

今川了俊は、九州進発にあたって、前の大將軍洪川義行の失敗にかんがみて慎重に作戰計画を立てた。すなわち、一族の者を豊後と肥前に上陸させ、その地の武士を糾合（きうごう）して太宰府へ向かい、了俊自らは少し遅れて正面から門司へ渡り、豊前・筑前を経て、太宰府で一族の者たちと合流し、懐良親王方を壊滅させるというものであった。